

『ぶらぶらドール』

佐倉尚紀

〃仔犬の香り

幼き頃の

我が香り〃

記憶にある最初の犬との出逢いは、5・6歳のころ。かくれんぼをしたり、相撲をとったりとよく遊んだものでした。

もう五十年以上も昔のことになります。

名前は定番の「ポチ」。以来「ジヨリ」、「初代コマ」そして「二代目コマ」へと続きます。

その後、私を実家を離れていたこともあり、犬との交友は一時途絶えました。

結婚して子供が小学生のころでした。ひよんなことから再び犬との交友が始まったのです。

「茶」そして今回主役の「さくら」です。

「さくら」は初めての大型犬種「ラブラドル」です。

とぼけ顔した「ぶらぶらドール」でもあります。

〃飼い主を

飛び跳ねさせて

ラブが行く〃

我が家にラブラドルの仔犬が来たのが、平成十二年六月のことでした。

生後三十五日の愛くるしい姿に、たちまち家族のアイドルとなりました。

四月生まれの女の子。子供の提案で「さくら」という名前に決めました。以来、我が家は「さくら」中心の生活リズムとなつてしまいました。

両腕に包み込まれるその姿に、

妻は「ずーっとこのままでいて」と。数カ月後に、飼い主を飛び跳ねさせることになるとも知らずに。

散歩は朝夕二回、休日は三回の時もあります。

朝は私、夕方は妻とこれが基本的なパターンです。

冬の雨風、みぞれは結構辛いこともあります。

しかし、冬晴れの明け方、少しずつ陽光が山手に広がる風情や、日中やんわりとした陽射しの下での散歩は心満たしてくれるものがあります。

そんな「さくら」の最も成長変化の著しい前半部分での触れ合いの中から、その折々に感じたことを「七五調」の短文に綴ってみました。

犬を飼っているお宅なら、どこでも見られる光景だと思いません。

今「さくら」は、我が家に来
てから六年になります。

第一部

さくらはまだ蕾

姿・形、その仕草。

花に例えれば、まだまだ可憐
な蕾といたるところ。
すべてはこれからこれから

第一章

出逢い

母のぬくもりを覚える間もな
く、今、見知らぬ私にその小さ
な身体と精一杯の命を託そうと
しています

一・ チョコチョコと

歩く姿は

ぬいぐるみ

抱く口元

ミルクのにおい

二・

助手席の
ボール箱から

顔をだし

ピーピーきやんきやん
泣く声哀れ

三・

ひと月で

家族と別れ
独りきり

見知らぬ家で
暮らし始まる

四・

触れてみりや
薄皮まんじゅう

太鼓腹

さっきの食事が

飛びだしやせぬか

五・

寝てるのか
死んでいないか

気にかかる

口や腹など

動き見るまで

第二章

戦い

テレビでよく目にするラブや
さしい眼差し、奥ゆかしい
態度。脳裏に浮かぶお利口犬と
ころがところが・・・

六・

よく寝てる
血筋の良い犬

おとなしい

喜びつかの間

戦はじまる

七．ぶらぶらと

してるこの犬

昼ひなか

ぐっすり寝込んで

夜に備える

八．あちこちに

うんこや小便

撒き散らし

我が家の玄関

異臭漂う

九．柵をして

囲ってはみたが

出たいよと

泣いて騒いで

かじり倒して

十．何で泣く

何もせぬのに

なぜ吠える

教えて欲しい

口きけたなら

十一．手を噛まれ

足を噛まれて

我慢して

高価（たか）い下駄箱

噛まれて泣いた

十二．トイレここ

寝場所はここと

教えしも

わが意に反し

無残な姿に

十三．新しい

サンダル一夜で

変わり果て

中身ボロボロ

心オロオロ

十四．大型犬

食事の量も

驚くが

出たでた糞も

これまたビックリ

十五．お手はよせ

その手はさつき

糞踏んだ

意地悪するきか

このとぼけ顔

十六．真剣に

叱っているのに

我が愛犬は

耳を掻きかき

よそ見やあくび

十七．目を覚まし

ブルル身を振り

窓叩き
吠えて呼び出す
悪い癖

十八・ ウンコして

早く取ってと
窓たたき
吠えて騒いで
おお威張りして

十九・ うるさいと

云うより早く
逃げ出して
様子覗う
したたかさ

二十・ この時間

吠えても仕方
ないけれど
真夜中だけは
よせよせよせよ

二十一・ こうなれば

体力勝負と
腹を決め
起きたぞ一時
二時三時四時

第三章

独歩

個性が一段とはっきりしてき
ました。成長したのは身体だけ
ではないようですが？

二十二・ 劣等生

しつけ教室
終了証
わずかな隙に
くわえ引き裂く

二十三・ お手待て立て

紛らわしいよ
日本語は
わたしや洋犬
英語で話せ

二十四・ 正確な

体内時計
持つ愛犬は
散歩の時間と
呼ぶ午前五時

二十五・ 正月の

夜をひきずる
空模様
眠気を抑え
愛犬と散歩する

二十六・ 室内の

賑やかな声
耳にして
寂しさからか

ふすまを叩く

二十七・折角の

一芸無視され

口を開け

くわえた小道具

ポトンと落とす

するのかお前

吠える人

吠えぬ人とを

どこで見分ける

三十四・雪道で

転んだ主人の

そばにきて

心配そうに

顔のぞきこむ

二十八・赤信号

オスワリさせて

待つ愛犬も

寄せる視線に

チョット胸を張り

三十二・散歩道

お前犬だろ

もう少し

前後左右の

危険予知

三十六・この愛犬に

言葉があつたら

何と言う

オイこらちやんと

よく世話をしろ

二十九・お前とは

やはり違うぞ

盲導犬

テレビに映る

その凛々しさは

三十三・

餌をやり

美味いだろうと

尻尾で応えて

口休ませず

三十五・お手伝い

すっかりくわえた

ゴミ袋

捨て場に書いても

まだ離しやせぬ

三十・選り好み

三十七・三キロに

満たぬ身体

手のひらに
乗りし頃は
昨日のごとし

三十八・ 飼い主を

飛び跳ねさせて
ラブが行く

初めて散歩に連れ出した時、
玄関の僅かな段差でためらって
いました。
それは室外に出た彼女にとって、
偉大なる冒険の始まりだったの
かも知れません。

〃 三月（みつき）たち

初の冒険 散歩道

じゃじゃ馬娘が

借り猫になり〃

完